

# ダニエル書 - 第十九番

## ダニエル書における「時」という語の預言的意義

Jeff Pippenger

2023-12-14

旧約聖書ではダニエル書にしか見られない「hour」という語は、常に何らかの裁きと結び付けられている。第3章では、それは日曜法を表しており、シャデラク、メシャク、アベデネゴによって象徴される旗印に重点が置かれている。

第四章では、それは1798年に第一の天使のメッセージによる警告が到来したことを表している。第四章で二度目に用いられたときには、それは1844年10月22日の調査審判の開始を表していた。第四章における「時」という語の二度の用法は、1798年から1844年に至る第一と第二の天使のメッセージの歴史を表している。その歴史とは、黙示録10章の七つの雷の歴史である。七つの雷は、第四章で「時」という語が二度用いられていることによって表されており、したがって、それは1989年から、まもなく到来する日曜法に至るまでの第三の天使の歴史も表している。

第五章では、「時」という語は日曜法も表しているが、そこでは聖書預言の第六の王国であるアメリカ合衆国の終わりに重点が置かれており、その姿は、聖書預言の第一の王国であるバビロンの終わりによって型示されている。第三章では焦点は炉の中の旗印に置かれていたが、第五章ではベルシャザルの運命と彼に下された特別な裁きに焦点が置かれている。ただし、最終的にはダニエルも物語に登場し、旗印を型示す者として現れる。

日曜法においては、ネブカドネザルの奉献の「時」とベルシャザルの死が表されている。四章で審判の開始として示されている「時」は、1844年10月22日における調査審判の開始を指し示すとともに、日曜法における執行審判の開始も指し示す。1844年10月22日に天の聖所で審判の書が開かれることにせよ、あるいは救いを拒んだ者たちにもたらされる神の審判が日曜法における執行審判の初めに始まることにせよ、近づくいずれの審判に対する警告も、ダニエル書四章における「時」という語の最初の使用によって表され、二種の審判のいずれかの実際の開始は、同章で「時」という語が二度目に用いられることによって表されている。

ダニエルが用いる「hour」という語は、言語学的に言えば「多義語」である。多義語とは、同じ見出しの下にまとめられる複数の定義を持つ語のことである。ダニエルが「hour」という語を用いている五回はいずれも審判を指しているが、それぞれ、神の報復的審判（すなわち執行審判）か、だれが救われるか救われないかを神が決めておられる調査審判の、異なる側面を扱っている。1844年10月22日に始まった調査審判であれ、まもなく来る日曜法の際に始まる執行審判であれ、どちらの審判も本質的に段階的に進行する。神の報復的、すなわち執行審判は日曜法から始まり、段階的に激化して、ついには人類の恩恵期間の終結と最後の七つの災いに至る。

ダニエル書第5章は、「時」という語を用いて、ベルシャツアルの死と彼が統治していた国の滅亡によって表される神の執行的な裁きを示している。

その同じ時、人の手の指が現れ、王の宮殿の壁の漆喰に、燭台の向かい側のところに、文字を書いた。王は、書いているその手の指先を見た。ダニエル 5:5.

裁きの執行は日曜法が制定される時に始まる。これはネブカドネザルによる金の像の奉獻式によっても表されている。しかし、その「時」は、むしろ日曜法によって引き起こされる危機の中での神の民の救出に関わっている。ツロの淫婦に対する裁きの執行も、またアメリカ合衆国に対するそれも、日曜法が制定される時に始まる。これが、ダニエル書において裁きを象徴する「時」である。

また、私は天から別の声を聞いた。「わたしの民よ、彼女から出て来なさい。彼女の罪にあずからず、彼女の災いを受けないためである。」彼女の罪は天にまで達し、神は彼女の不義を覚えておられる。彼女があなたがたにしたとおりに彼女に報い、その行いに応じて、彼女に倍にして返せ。彼女が満たした杯には、彼女のために二倍を満たせ。彼女がどれほど自らを榮えさせ、ぜいたくに暮らしたかに応じて、その分だけ彼女に苦しみと悲しみを与えよ。彼女は心のうちで、「私は女王として座に就き、やもめではない。悲しみを見ることはない」と言っているからである。それゆえ、彼女の災いは一日のうちに来る。すなわち死と喪と飢饉とが、彼女は火で完全に焼き尽くされる。彼女をさばく主なる神は強いからである。地の王たちは、彼女と姦淫を行い、彼女と共にぜいたくに暮らした者たちだが、彼女が焼かれる煙を見て、彼女のことで嘆き悲しむ。彼女の苦しみを恐れて遠くに立ち、「ああ、ああ、大いなる都バビロン、強大な都よ。たった一時間のうちにあなたのさばきが来た」と言う。黙示録 18:4-10.

アメリカ合衆国における日曜法は、執行的審判の始まりであり（それはまた漸進的でもあるが）、バビロンにまだいる神の子らが旗印によって呼び出されるその「時」に始まる。それは、「あの大いなる都、バビロン」に審判が臨むその「時」である。「時」という語で表されているその審判は、神のほかの群れがバビロンから呼び出される期間を包含している。

その日、エッサイの根が民のための旗印として立ち、異邦人はそれを求め、その安息は栄光に輝く。その日、主は再び、二度目に御手を伸ばして、アッシリア、エジプト、パトロス、クシュ、エラム、シヌアル、ハマテ、そして海の島々から、残されているご自分の民の残りの者を取り戻される。主は諸国のために旗印を掲げ、イスラエルの追い散らされた者を集め、地の四隅からユダの散らされた者を集められる。イザヤ書 11:10-12.

主は1844年の第一の天使の運動において、人々をバビロンから呼び出された。そしてその歴史の第二の天使は、終わりの日に、すなわち「主がふたたび御手を伸ばして、その民の残りの者を回復される」ときに、再び起こる。主が「再び」呼び出しておられるその民の残りの者は、旗印ではない。というのも、その旗印とは「エッサイの根」であり、「異邦人が求める」「旗印」として立ち上がるからである。神は二度目に、諸国の民をバビロンから呼び出される。

彼はまず、「イスラエルの追放民」、すなわち「ユダの離散者」であり、「地の四隅から」来る者たちを、エゼキエルの死んで干からびた骨の谷を通っている黙示録第十一章の街路で三日半のあいだ死体となって横たわったのち、その終わりに一つに集めることによって、そうする。

『強大な都』である『バビロン』に対する神の執行裁きが始まる『時』は、黙示録第十一章の『大地震』の『時』と同じである。神の執行裁きはその『時』に始まる。というのも、黙示録第十一章では、地震の『時』に七千人が打ち殺されるからである。その七千人は、通常よりも『七倍』熱くされた炉にシャデラク、メシャク、アベデネゴを投げ込む際に死んだ、ネブカドネザルの『最も強い兵士たち』によって象徴されていた。フランス革命では、その『七千人』はフランスの王族、すなわちその力ある者たちを表していた。第五章ではベルシャザルが殺されただけでなく、その軍勢も滅ぼされた。日曜法の『時』は、神の民が炉に投げ込まれることによって表される迫害の開始を告げるが、それはまた、大いなる都バビロンに対する神の執行裁きの始まりをも画する。

それはまた、黙示録第11章に記されている大地震の「時」でもあり、そのとき、底なしの淵から上ってきた獣によって大通りで殺された、かつて死んでいた者たちの骨が、旗印として天に上げられる。そこではまた、第三の災い、すなわち第七のラッパが吹き鳴らされるのも同じ「時」である。第七のラッパは第三の災いであり、その最後の災いのラッパの目的は、日曜礼拝を強制する者たちに裁きをもたらすだけでなく、諸国民を怒らせることにもある。第三の災い、第七のラッパ、そして諸国民の激怒は、いずれもイスラム教の預言的役割に関わる象徴であり、それらは皆、大地震の「時」に位置づけられている。

そして彼らは、天から大いなる声が彼らに「ここへ上って来なさい」と言うのを聞いた。彼らは雲に包まれて天に上って行き、敵はそれを見た。まさにその時、大きな地震が起こり、都の十分の一が倒れ、地震で七千人が死んだ。残された者たちは恐れに打たれ、天の神に栄光を帰した。

第二のわざわいは過ぎ去った。見よ、第三のわざわいがすぐに来る。第七の御使いがラッパを吹いた。すると天で大きな声がこう言った。「この世の国々は、我らの主とそのキリストのものとなった。主は世々限りなく統べ治められる。」神の御前で座に着いていた二十四人の長老たちは、顔を地に伏せて神を礼拝し、こう言った。「今いまし、かつていまし、やがて来られる全能の主なる神よ、私たちはあなたに感謝します。あなたは大いなる力をとられ、統べ治められたからです。諸国の民は怒りましたが、あなたの御怒りが来ました。また、死者がさばきを受け、あなたのしもべである預言者や聖徒、そしてあなたの御名を恐れる者、小さき者も大いなる者も、報いを受け、さらに地を滅ぼす者どもが滅ぼされる時が来ました。」 黙示録 11:12-18.

エゼキエルの死んだ骨は「雲に乗って天に上り」、ネブカドネザルの音楽が鳴り始め、「ツロの淫婦」が歌い始め、背教したイスラエルが踊り始める「時」に、「彼らの敵」は「彼ら」を目にする。背教したイスラエルは偽預言者を表し、ネブカドネザル王は竜であり、ツロの淫婦は獣である。その踊りは、エリヤの物語におけるバアルの預言者たちと林の預言者たちによって例示されている。また、それはヘロデヤの娘サロメの踊りによっても示された。バアルは偽りの男性神であり、アシュタロテは女性神である「林の預言者たち」を指す。両者は合わせて、教会（女）と国家（男）の結合を表す。両者は合わせて、アメリカ合衆国の偽預言者を表す。サロメは、その偽預言者がローマの娘であり、その像がアメリカ合衆国における教会と国家の結合であることを示している。

そこで、そのとき、あるカルデヤ人たちが近づき、ユダヤ人を告発した。彼らは口を開いてネブカドネツアル王に言った。「王よ、永遠に生きられますように。王よ、あなたは布告をお出しになりました。すなわち、角笛、笛、豎琴、サクソバット、サルタリー、ダルシマー、ならびにあらゆる種類の楽器の音を聞く者は、ひれ伏して金の像を拝まねばならない、と。また、ひれ伏して拝まない者は、燃えさかる火の炉のただ中に投げ込まれる、と。ところが、あなたがバビロン州の仕事を取り仕切る者として立てたユダヤ人、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴがいます。王よ、この者たちはあなたを顧みず、あなたの神々に仕えず、あなたの立てられた金の像を拝みません。」ダニエル書 3:8-12

その「時」に、シャドラク、メシャク、アベド・ネゴの敵は、彼らが獣の刻印を拒んだことを見て、定められた裁きを執行するよう王に嘆願した。その「時」に、地の獣に対峙する揺さぶり（すなわち地震）である日曜法のもとで、ネブカドネツアルの激怒と憤激があらわになる。

そこで、ネブカドネザルは激怒して、シャドラク、メシャク、アベド・ネゴを連れて来るよう命じた。こうして、彼らはこの人々を王の前に連れて来た。ダニエル書 3:13。

神の二人の証人（シャデラク、メシャク、アベデネゴ）に対して加えられる迫害は、彼らがひれ伏すことを拒むとき—すなわち、黙示録11章の表現では彼らが自分の足で立つとき—に起こる。

そして三日半の後、神からのいのちの霊が彼らのうちに入り、彼らは自分の足で立ち上がった。彼らを見た者たちの上に大いなる恐れが臨んだ。彼らは天から「ここに上って来なさい」と告げる大きな声を聞いた。すると彼らは雲に包まれて天に上って行き、彼らの敵はそれを見た。黙示録 11:11、12。

彼らはひざまづくことを拒み、エゼキエルの「非常に大いなる軍勢」として自らの足で立ち上がる。彼らは、アメリカ合衆国における政教一致の形成に抗議し、間もなく制定される日曜法を警告し、神の報復的裁きが第三の災いとしてのイスラムによってまさに成し遂げられようとしていることを示す封印のメッセージを受け、それを宣言するときに、なおも立ち続ける。真夜中の叫びのメッセージは、ダニエル書二章でダニエルに明らかにされた「奥義」によって表されており、神の終末の民がその「真理」にしっかりと定着するとき、差し迫った地震によっても揺り動かされることはない。

バトルクリークでの働きも同じやり方で進められている。療養所の指導者たちは不信者と交わり、多かれ少なかれ彼らを評議の場に受け入れてきたが、それは目を閉じて事に当たるようなものだ。彼らには、いつ何時私たちに何が降りかかるかを見抜く識別力が欠けている。絶望、戦争、流血の霊があり、その霊は時の終わりに至るまで勢いを増していく。神の民が額に印を押されるやいなや—それは目に見える印や標ではなく、知的にも霊的にも真理に落ち着き、動かされなくなる—神の民が封印され、揺り動かすに備えられるやいなや、その揺り動かすはやって来る。実際、それはすでに始まっている。神の裁きは今やこの地に臨んでおり、私たちに警告を与え、何が来ようとしているのかを知ることができるようにするためである。『Manuscript Releases』第10巻、252頁。

封印は、はじめは人間の目には見えないが、その後には誰の目にも見えるようになる印を表している。神の民が「真夜中の叫び」のメッセージを受け入れるとき（それはダニエル書2章でダニエルに明かされた「秘密」によって表されてきた）、彼らは獣の刻印へと導く獣の像の「秘密」を受け入れたことになる。獣の刻印は神の裁きをもたらし、その裁きはイスラムを通して行われる。これは「絶望、戦争、流血の霊」が増大している時に起こる。その時は今である。また、それはアドベンチズムの指導者たちがラオデキア的盲目のために見ることができない時に起こる。真夜中の叫びにおいて最終的に確定する封印の過程の間、賢い乙女たちの額にその印が押されるが、それは目に見えない。シャデラク、メシャク、アベデネゴは、ネブカドネツアルとの対話に示されているように、真理に確固として据えられた者たちを表している。

ネブカドネザルは彼らに言った。「シャデラク、メシャク、アベデネゴよ、おまえたちがわたしの神々に仕えず、わたしが据えた金の像を拝まないというのは本当か。さあ、もしおまえたちが、角笛、笛、豎琴、サクバット、プサルテリー、ダルシマー、そしてあらゆる種類の音楽の響きを聞くと、ひれ伏してわたしが造った像を拝む用意ができていたら、それでよい。だが、もし拝まないなら、その時ただちに燃えさかる火の炉のただ中に投げ込まれる。わたしの手からおまえたちを救い出せる神がいるというのか。」 シャデラク、メシャク、アベデネゴは王に答えて言った。「ネブカドネザルよ、この件についてあなたに弁明する必要はありません。もしそうなれば、私たちの仕える神は、燃えさかる火の炉から私たちを救い出すことがおできになります。また、王よ、神はあなたの手からも私たちを救い出してください。しかし、たとえそうでなくても、王よ、どうか知ってください。私たちはあなたの神々に仕えず、あなたが据えた金の像を拝みません。」 ダニエル書 3:14-18

その後、三人の賢者が、目に見える神の印を顕す。まず、目には見えない内なる印を持つ者だけが、神の印が見られねばならない時に、それを顕すことに携わる。

そのときネブカドネツアルは激しく怒り、シャドラク、メシャク、アベデネゴに対する顔つきが変わった。それで彼は命じ、炉をいつもよりも七倍も熱くするようにさせた。さらに彼は軍の中で最も力の強い兵士たちに、シャドラク、メシャク、アベデネゴを縛り、燃え盛る火の炉に投げ込むよう命じた。こうして彼らは上着、ズボン、帽子、その他の衣服を着たまま縛られ、燃え盛る火の炉の真ん中に投げ込まれた。王の命令が急で、しかも炉が非常に熱かったので、シャドラク、メシャク、アベデネゴを連れて行った者たちは、火の炎に焼かれて死んだ。だがこの三人、シャドラク、メシャク、アベデネゴは、縛られたまま燃え盛る火の炉の真ん中に落ちた。そのとき王ネブカドネツアルは驚いて急ぎ立ち上がり、顧問たちに言った。「我々は縛られた男を三人、火の真ん中に投げ込まなかったか。」彼らは王に答えて言った。「まことにそのとおりです、王よ。」彼は言った。「見よ、私は四人の男が、縛めを解かれて火の真ん中を歩き回っているのを見ている。彼らは何の害も受けていない。しかも第四の者の姿は神の子のようだ。」 ダニエル書 3:19-25。

シャドラク、メシャク、アベド・ネゴによって象徴される二人の証人は、やがて旗印として高く掲げられ、そのとき封印が現れる。

聖霊の働きは、罪と義と裁きについて世に悟らせることである。世界は、真理を信じる者たちが真理によって聖められ、気高く聖なる原則に基づいて行動し、神の戒めを守る者とそれを足もとに踏みにじる者との間にある一線を、崇高な姿勢で示すのを見ることによってのみ、警告を受けることができる。聖霊による聖化は、神の印を持つ者と、偽りの安息日を守る者との違いを明らかにする。試練が来るとき、獣の刻印が何であるかが明らかに示されるだろう。それは、日曜日を守ることである。真理を聞いたのちにもなおこの日を聖とみなし続ける者は、時と律法を変えようとした「罪の人」のしるしを負っている。バイブル・トレーニング・スクール、1903年12月1日。

日曜法が施行されると、アメリカ合衆国は自らの預言的な働きを成し遂げるために国連に頼るようになる。アメリカ合衆国は、サロメの踊りに象徴される自らが行う奇跡によって世界を欺く。彼女がその欺きの踊りを演じているあいだ、ツロの淫婦は自分の歌を歌い、ネブカドネザルの楽隊が音楽を奏でる。アメリカ合衆国は、世界にその歌を受け入れさせ、像の前にひれ伏すよう強いることを主導する。

また私は見た。地から上ってくるもう一つの獣がいた。その獣には小羊のような二本の角があり、竜のように語った。彼は第一の獣の前で、そのすべての権勢を行使し、致命的な傷がいやされたその第一の獣を、地とそこに住む者たちに礼拝させた。また彼は大いなるしるしを行い、人々の目の前で、天から火を地上に降らせるほどであった。そして彼は、獣の前で行うことを許されたその奇跡によって地に住む者たちを惑わし、剣で傷を負いながら生きたその獣の像を作るよう、地に住む者たちに言った。彼はまた、獣の像にいのちを与える力を与えられ、獣の像が語ることもでき、さらに、獣の像を礼拝しない者はみな殺されるようにした。彼はまた、小さい者にも大きい者にも、富める者にも貧しい者にも、自由な者にも奴隷にも、すべての者に、右手か額に刻印を受けさせた。そして、その刻印、または獣の名、あるいはその名の数を持つ者以外は、だれも買うことも売ることもできないようにした。ここに知恵がある。悟りのある者は獣の数を数えよ。それは人間の数であり、その数は六百六十六である。ヨハネの黙示録 13:11-18。

終末におけるエジプトは、世界（その時は国際連合に統治されている）を象徴する。しかし、助けを求めてエジプトに頼る者たち（アメリカ合衆国）に対しては、「災い」（イスラムの象徴）が宣告されている。三人の勇士が炉に投げ込まれ、世界の旗印となるとき、その炉は実際にはネブカドネザルの炉ではない。

助けを求めてエジプトに下る者たちに災いあれ。彼らは馬に頼り、戦車が多いからとそれに信頼し、騎兵が非常に強いからとそれに寄りかかる。しかしイスラエルの聖なる方を仰ぎ見ず、主を求めもしない。しかし主もまた知恵ある方で、災いをもたらし、その言葉を取り消されない。むしろ悪を行う者の家に対して立ち上がり、不義を行う者の助け手に対しても立ち向かわれる。さて、エジプト人は人であって、神ではない。彼らの馬は肉であって、霊ではない。主が御手を伸べられるとき、助ける者も倒れ、助けられる者も倒れ、彼らは皆ともどもに滅びる。主は私にこう言われた。獲物の上でうなり声をあげる獅子や若獅子のように、たとえ多くの羊飼いたちが彼に向かって呼び集められても、その声を恐れず、そのどよめきにひるむことはない。それと同じように、万軍の主はシオンの山とその丘のために戦うために下って来られる。飛ぶ鳥のように、万軍の主はエルサレムを守られる。守ってこれを救い、かばってこれを

保たれる。イスラエルの子らが深く背いたその方に、あなたがたは帰れ。その日には、人はみな、自分たちの罪のために自分の手で造った銀の偶像と金の偶像を投げ捨てる。そのときアッシリヤは、勇士の剣によらずに倒れ、卑しい者の剣でもない剣が彼を食い尽くす。彼は剣の前から逃げ去り、その若者たちは打ちひしがれる。彼は恐れて自分の要塞へと退き、その君たちは旗印におののく——その火はシオンにあり、その炉はエルサレムにある主の御告げ。イザヤ書31章1-9節。

エルサレムは、世界が注目する炉であり、世界はその中を歩いている四人の男を見るだろう。

そのときネブカドネザルは、燃え盛る炉の口に近づいて言った。「シャデラク、メシャク、アベド・ネゴよ、いと高き神のしもべたちよ、出て来て、こちらに来なさい。」そこでシャデラク、メシャク、アベド・ネゴは、火の中から出て来た。すると、太守、総督、隊長、および王の顧問官たちが集まって彼らを見たが、彼らの身には火の力が及んでおらず、頭の毛一本すら焦げておらず、衣服にも変わりはなく、火のにおいすら彼らに移ってはいなかった。ネブカドネザルは言った。「シャデラク、メシャク、アベド・ネゴの神はほむべきかな。この方は御使いを遣わし、この方に信頼したそのしもべたちを救い出された。彼らは王の命令に背き、自分たちの身をさし出して、自分たちの神以外のどんな神にも仕えず、拝まないようにしたのだ。」ダニエル書 3:26-28。

その後、ネブカドネザルはさらに別の勅令を出した。その勅令は、終わりの時代における最後の勅令を象徴している。彼は死刑令を公布するが、天の神を高く掲げようとする彼の拙い試みの中で、それは実際には世の終わりの死刑令の預言的象徴となっている。世の終わりの王を表すネブカドネザルは、ローマの淫婦と姦淫する竜の十人の王の象徴である。預言的な展開における次の勅令は死刑令であり、ネブカドネザルが自分の時代のために勅令を出しているとしても、実際には彼は終末の三者連合による最後の勅令を表している。その勅令とは、恩恵期間が閉じられた後に施行される死刑令のことであるが、神の民に対してそれが実行されることは決してない。

それゆえ、私は布告する。シャデラク、メシャク、アベド・ネゴの神を少しでも悪く言ういかなる民、国、言語の者であれ、ばらばらに切り裂かれ、その家は糞だめとされる。というのも、このように救い出すことのできる神は、ほかにいないからである。そこで王は、バビロンの州でシャデラク、メシャク、アベド・ネゴを昇進させた。ダニエル書 3:29、30。

私たちは今や、ダニエル書の最初の三章について十分に記録に収めたので、第四章と第五章の考察を始めることができる。これらの章は「繰り返しと拡大」という預言の原則に従っている。ダニエル書第4章は1798年と地からの獣の始まりを特定し、第5章は日曜法と、それが竜のように語るときの地からの獣の終わりを特定している。三天使のメッセージの構造を築き上げるために、この二つの章は最初の三章と「行に行を重ねる」かたちで一つにまとめられなければならない。この事実ゆえに、まず最初に「行に行を重ねる」という原則を慎重に定義する。

続きは次回の記事でお届けします。

ベルシャツアルには、神のみ旨を知りそれを行うための多くの機会が与えられていた。彼は、祖父ネブカドネツアルが人間の社会から追放されるのを見た。彼は、誇り高い君主が誇っていた知性が、それをお与えになった方によって取り去られるのを見た。彼は、王が王国から追われ、野の獣の仲間とされたのを見た。しかし、ベルシャツアルの娯楽と自己誇示への愛は、決して忘れてはならない教訓を消し去り、彼はネブカドネツアルに顕著な裁きを招いたのと同様の罪を犯した。彼は、恵みとして授けられた機会を無駄にし、真理を知るために手の届くところにある機会を用いることを怠った。「救われるために私は何をしなければならないのか？」という問いを、その偉大ではあったが愚かな王は無関心に聞き流した。バイブル・エコー、1898年4月25日。